

作曲家の柴田^{みなお}南雄氏が受賞
第13回サントリー音楽賞

第13回(昭和56年度)サントリー音楽賞は3月2日、東京・赤坂のサントリービルで開かれた最終選考会で、作曲家の柴田南雄氏に決まった。贈賞式は4月26日、東京・丸の内の東京会館で行われる。

同賞は、日本のクラシック音楽の発展、向上に最も寄与した日本人に贈られるもので、賞金は300万円。

この日午前10時からの最終選考会は、去る1月15日、「サントリー音楽賞候補者」としてノミネートされた大木正興氏、木之下晃氏、柴田南雄氏、若杉弘氏、和波孝禧氏の5人と日本テレマン協会を対象に選考を開始。5人の候補者のなかに選考委員の大木正興氏が入っているため同氏を除外、芥川也寸志、宮沢縦一、吉田雅夫各氏ら10人の選考委員全員が、長時間にわたる慎重な審査の結果、柴田氏を選ぶことで全員の意見が一致、引き続き開かれた理事会で正式に承認された。

柴田氏は、大正5年東京生まれ。昭和14年東京大学植物学科卒、18年同文学部美学科卒。諸井三郎氏に師事して作曲を学ぶ。21年、「新声会」の創設に参加、その後吉田秀和氏らと「二十世紀音楽研究所」を設立するなど、先進的音楽家の中心として活躍。48年、「コンソート・オブ・オーケストラ」で尾高賞を受賞。現在、日本現代音楽協会と日本作曲家協議会の各名誉会員。

受賞理由は、永年にわたり日本各地に伝わる音楽、祭り、芸能などを素材にしたシアター・ピースの創作に主体的に取り組み、その独創的な活動が再認識されたことによる。特に、昨年東京文化会館で一括上演された「追分節考」、「北越戯譜」など4作品が、従来の演奏会音楽の制約を超え、クラシック音楽にユニークな貢献をしたほか、「卯月の緑」^{うつき みどり}、「ジェネレーション」、歌曲集「碧い部屋」などが、個性と独自の表現方法を活用した作品として高く評価された。

受賞の知らせを聞いて記者発表会場に駆けつけた柴田氏は「賞にあまり縁がない者が由緒あるサントリー音楽賞をいただき感激している。今後も同じような仕事をしていきたい」とひかえめに喜びを語った。